邦楽爛漫

奏

【演目解説】

1. 雅楽 左舞『抜頭』

天平年間（729－749）に南天竺（南インド）の僧婆羅門僧正菩提僊那と林邑（南ベトナム）の僧仏哲により我が国に伝えられたとされています。一人舞。舞人は朱色の装束を着て、鼻が高く髪の長い赤い面をつけ、太い桴を持ち舞います。

曲の由来は諸説ありますが、猛獣に親を殺された胡人（こじん）の子が、山野にその猛獣をさがし求め、ついに親の仇を討ち歓喜する姿を模したものや、唐の后が嫉妬に狂い鬼となったものなどがあります。

2. 日本舞踊・清元・邦楽囃子『流星』

七夕の夜に牽牛（けんぎゅう）【彦星のこと】と織姫が年に一度の逢瀬を楽しんでいるところに流星が飛んできて天上界のことについて知らせに来ます。話の内容とは、自分の隣に住む雷夫婦の喧嘩のことでした。ある日、父雷が雲から落っこちてしまい、端唄の師匠のところに居候しました。その折に聞いて覚えた端唄混じりの雷を、天上界に戻ってもつい鳴らしてしまいます。その鳴り様に呆れた母雷と夫婦喧嘩になってしまいます。子雷や隣の婆雷が仲裁に入りますが、いっこうに収まりません・・・

3. 箏曲山田流・邦楽囃子『七福神』 初世 中能島 松聲 作曲

浄瑠璃（富本）掛け合い物。七福神とは、正月の宝船などに描かれる毘沙門天・福禄寿・寿老人・布袋和尚・恵比寿・大黒天・弁財天女の七人の神をいいますが、この曲は、これに寄せてさる大家の隠居所の新築祝のための祝儀曲としたもので、江戸の下町の地名が巧みに詠みこまれています。

4. 尺八 編曲『吾妻の曲』 藤原 道山 編曲

もともと博多一朝軒に伝わる曲で「吾妻獅子」とも呼ばれる獅子ものの一つ。博多一朝軒十七代看主の磯一蝶より樋口対山、吉住深山より初代川瀬順輔に伝えられたと言われています。

曲名の「吾妻」は東を表し、西国の人が東国の人を慕って吹いたという説、東琴(和琴)や里神楽の旋律を写した曲だという説など諸説あります。

「雲井獅子」「伊予恋慕」「三谷菅垣」などと共に、戯曲と呼ばれる修行の曲ではない戯れの小曲で、虚無僧が托鉢行脚に出て、大衆に軽妙な曲を求められた折りなどに吹いたと言われています。これらの曲は午前の厳粛な時間には吹いてはならぬ、昼を過ぎてから吹く曲ということで「昼カラ」とも呼ばれています。

今回、前奏と琴古流の本手に対する新たな替手と長管を加えた三部合奏として編曲しました。

（参考文献）上参郷祐康『古典本曲の集大成者 神如道の尺八 別冊解説書』
塚本　虚堂『塚本虚堂集 古典尺八及び三曲に関する小論集』
高橋　空山『普化宗史』

5. 能楽観世流 舞囃子『屋島』

西国行脚の途中、讃岐の国（香川県）屋島の浦に立ち寄った都の僧は、年老いた漁師の家に泊めてもらいます。昔の平家と源氏の屋島での戦の有様を問われると漁師はとても詳しく物語ります。僧が不思議に思っていると漁師は自分が源義経の幽霊であることをほのめかして姿を消します。

夜ふけに読経をしている僧の前に生前の甲冑姿の義経の霊が現れて、かつて屋島の戦いで自分が波に落とした小振りな弓を命がけで取り返し、敵から名誉を守った事を華々しく語ります。また、生前人と憎み合い闘いに明け暮れた結果、死後に戦いの繰り返される「修羅道」という世界に堕ちて戦い続ける様子を見せますが、夜明けの朝日とともに勇ましい武将の面影を残しつつ姿を消すのでした。

「屋島」は修羅能の中でも勝修羅と呼ばれ、勝戦（かちいくさ）の将の武勇を主題に物語ります。舞囃子とは、能の一部を面や装束をつけず、紋付・袴姿で地謡、囃子の伴奏で演じる形式です。

翔（カケリ）と呼ばれる緩急の変化の激しい囃子事の部分が有り、義経が弓を取り返した理由を語る場面から最後までを演奏致します。

蕎門通り
そば處
尾張屋
本店
TEL（3845）4500
支店
TEL（3841）8780
http://r.gnavi.co.jp/g615000/

天麩羅 中清
東京都台東区浅草一ノ三九ノ一三
（浅草公会堂前）
電話 〇三（三八四一）四〇一五（代）
http://www.nakasei.biz/

この国の佳き伝統とともに
宮本卯之助
株式会社 宮本卯之助商店　創業文久元年 太鼓・神輿・祭礼具 製造販売
www.miyamoto-unosuke.co.jp

磨き込まれた籐敷に
胡座をかいて
“どぜう鍋”
一刻文豪気分です。

〒111-0035 東京都台東区西浅草3-3-2 合羽橋本通り 電話：(03) 3843-0881
営業時間：午前11：30～午後9：00（水曜日定休）